

○「芸術と実生活」について..... 1	○対談「自分史を語ろう」..... 6
○ 第四回特別企画展..... 2	○ [250号・55周年記念 詩誌「沙漠」展 —ここにある ここに立つ そして歩む—]..... 7
○「与謝野寛・晶子展—恋ひ恋ふ君と—」	○ 詩誌「沙漠」主催 文学講座
○ 高橋睦郎氏 講演会「新しい詩歌の母神 晶子」	○ 交流ステージ&ワークステーション
○ 文学講座	○ 「小倉五行歌会五周年記念作品展」
○「くまの子ウーフとたのしい仲間たち 神沢利子展」 4	○ 子ども文化ふれあいフェスタ
○ 神沢利子さんおはなし会「同じうたをうたい続けて」	○ 「落語っ子 落語であそぼう」
○ 手芸教室「ウーフを作ってみよう」..... 5	○ 予告..... 8
○ ブックトーク+クイズラリー	○ 資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧
○ 16mmフィルム「ちびっこカムのぼうけん」 映写会	○ 文学館文庫の出版
○ 佐木館長と学ぼう!こどもベンクラブ	



# 「芸術と実生活」について

館長 佐木 隆三

文芸評論家平野謙（一九〇七〜七八）は、その著書『芸術と実生活』（一九五八年刊）のなかで、作家の生活と芸術との関係、とりわけ芸術家のエゴイズムと庶民倫理との背反に着目し、私小説作家に対して鋭い批判を展開しました。庶民の味方のようなふりをしながら、高級な別荘に住んで贅沢な暮らしをしているのは、どういうことなんだというわけです。こういう視点の文芸評論は、わが国では初めてで、平野謙の画期的業績とされています。

日本文学の主流は自然主義で、私小説が理想型とされてきました。大正時代に夏目漱石や森鷗外が、尊敬されながらも傍流として扱われた理由は、ここにあったのです。それを平野謙が、敢然と私小説批判をおこなったのだから、たいへんな出来事でした。プロレタリア文学の旗手だった作家が、「文筆労働で得た報酬で別荘を購入してどこが悪いのか？」と、文学雑誌のエッセイで息巻いたりしたものです。

一九六五年秋ごろ、八幡製鐵所を辞めて文学運動をしていたわたしは、平野さんを招いて小倉で講演をしてもらいました。背が高くギョロリと目を光らせる評論家は、島崎藤村が臨終の友人を見舞い、「死ぬって

どんな気持ち？」と問いかけたことなどを話したから、「さすが『芸術と実生活』の著者だ」と興味津々でした。今回こうして『芸術と実生活』を持ち出したのも、北九州市立文学館は、もっと文芸評論に目を向けなければならぬと思うからです。今年三月に亡くなった星加輝光さんは、文芸評論一筋で活躍なさいました。文学館の開設準備委員としても尽力され、八十八歳で天寿を全うなさったわけですが、わたしなどは未だ喪失感にとらわれています。そうであれば、星加さんの文学的業績を、きちんと顕彰しなければなりません。資料をお持ちの方は、ご協力をお願いします。



星加 輝光氏



## ▲企画展

「生誕一〇〇年記念

伊馬春部展

—向う三軒両隣の時代—

木屋瀬出身の劇作家で放送作家の伊馬春部の生涯と作品を紹介します。

《主な展示品》

自筆創作メモ、太宰治からの書簡、テレビドラマ「夕餉前」台本、ラジオドラマ「向う三軒両隣り」台本、草稿「木屋瀬中学校校歌」、遺愛の品ほか。

\*開催期間 9月27日(土)

〜11月30日(日) ※月曜日休館

(ただし月曜日が休日の場合

は開館、翌日休館)

\*入場料 一般二〇〇円、

中高生一〇〇円、小学生

五〇円(年間パスポート適用)



昭和29年4月 連続ラジオドラマ「本日は晴天なり」の収録スタジオにて

▲ 第四回特別企画展  
「与謝野寛・晶子展—恋ひ恋ふ君と—」  
4月19日(土)～6月8日(日)



本年、生誕二三〇周年を迎えた歌人・与謝野晶子と、その夫寛(鉄幹)の生涯と業績を展望する展覧会を開催しました。「第一部 近代詩歌の扉を開く―『明星』『スバル』の時代―」「第二部 自立する女性へのまなざし―女性の地位向上へ―」「第三部 九州での足跡」とし、特に第三部では地元の方々のご協力により、夫妻が九州に残した書や書簡などが揃い、充実した展示になりました。

・展示資料約一八〇点  
・入場者数二二六一人  
(イベント含む)

++++++  
高橋睦郎氏 講演会  
「新しい詩歌の母神 晶子」  
4月20日(日)

本展を記念して、北九州市出身の詩人高橋睦郎氏にご講演いただきました。与謝野晶子が近代詩歌に与えた影響について、詩や短歌の朗読を交えながらお話しいただきました。

◆◆◆  
ゲートルが「永遠に女性なるもの我らを導く」と言っています。

我ら男性というものは常に女性なるものに導かれて成長するのだと解釈すればいいでしょうか。詩人や芸術家の場合、特に女性の強い影響があります。そういう女性たちの大元にいるのが与謝野晶子で、ほかに比べようもない大きな存在ですね。私が晶子を認めるようになったのはごく最近で、むしろ寛の方を評価していました。「誠之助の死」という詩は、晶子の「君死にたまふことなかれ」よりも詩的結晶度が高いとかつて書きました。しかし今は、この作品は「君死にたまふことなかれ」がなければ生まれなかったと考えています。

晶子の人生を年譜に沿って見ていきますと、まず明治十一年に堺に生まれます。実家の菓子商駿河屋は相当大きな家でした。明治二十二年、お姉さんが結婚すると、晶子が代わりに店の帳場に出て切り盛りしていました。明治三十三年、寛が『明星』を創刊し、晶子も入社。その年の八月に寛が来阪し、山川登美子とともに初めて会っています。翌年、『みだれ髪』を鳳晶子の名

で新詩社から刊行し、秋に結婚。明治三十七年に「君死にたまふことなかれ」を『明星』に発表。大町桂月が危険思想であるとして批判します。明治四十一年に『明星』が百号で終刊。このあたりから家計は全て彼女一人が支えていくことになります。明治四十四年に寛がパリに向け出発、その費用二千元は晶子が調達しました。翌年五月に晶子は寛を追ってパリに向かい、その年のうちに單身帰国。明治四十四年に平塚らいてうが「青鞥」を創刊すると、女権運動に積極的に参加します。大正十年、西村伊作により文化学院が創設されると、学監に就任。大正十二年の関東大震災により、学院に預けていた源氏物語の現代語訳稿数千枚を焼失。昭和十年に寛が亡くなり、晶子自身は昭和十七年に亡くなりました。

晶子の生涯に対する僕の感想は四つあります。一つは、逆境にあっても辛抱強い事。例えば幼い頃は働きながら古典を耽

読。筆一本で家族を支え、原稿の焼失後源氏物語の訳を全てやり直しています。二つ目は、決断が早いという事。寛と出会って一年で家を捨てています。また寛を追ってパリに旅立っています。三つ目は、人に優しいが信念は曲げないという事。らいてうとの「母性保護論争」では、考えの違う事ははっきり述べています。四つ目は、生き方が首尾一貫しているという事。寛を一生支え続けた事からもわかります。とはいえ、この夫婦に波乱が全くなかったわけではなく、四女の宇智子さんの観察したと





高橋睦郎氏

ころでは、晩年、二人の関係は冷えていたようです。これは無理もないことで、妻にばかりスポットライトが当たるとは、どんな夫は内向して行く。しかし晶子は原稿を量産しなければならぬから、にこにこしてばかりもいられません。晩年、一緒に撮った写真を見ると、二人とも気難しい顔をしていますね。晶子が、自伝的な小説「明るみへ」の中で、寛がかなり鬱屈していて、嫌な男であるように書いています。しかし晶子は精神的に健康であった人のようですね。お金に困って愚痴を言ったりもするけれど、そんなに深刻じゃない。それで支援する人も出てきたり、出版社がお金

の前借りをさせてくれたりします。基本的にはたくましいんです。苦境を苦境とも思わないところがあって、向上心をいつも持っていて、成長していくんですね。それで夫も成長させたい、子どもには教育を受けさせたいという気持ちを持っていました。寛は「与謝野寛短歌全集」の序文で、手放しの妻褒めをしています。寛の没後、晶子も寛をたたえる歌を作っています。例えば、

取り出でて

死なぬ文字をば読む朝は  
なほ永久の恋とおほゆる

寛の書いたもの、つまり文学で

すね、これを読むと今でも永久の恋だと思えると。

世の中は寛よりも晶子を評価しました。しかし晶子の意識としては、自分はいくまでも夫の代理だ。そういう意味でも晶子は本来の天照だと思えます。詩歌の大巫女であることによつて、女神として私たちの前に輝いている。しかし寛は、彼女が本当の女神で、自分は男巫女であるというような麗しい事を言っています。

彼女の歌を一つ選ぶとすると、

劫初より作りいとなむ殿堂に  
われも黄金の釘一つ打つ

世の始まりから、人間が、あるいは人間を超えた存在が作りいとなんできた詩歌の殿堂に、私も及ばずながら黄金の釘を一つ打つんだ。それが私の人生であり仕事なんだという事を言っています。謙虚であると同時に誇りに満ちた歌ですね。彼女の一生をよく代表している歌ではないでしょうか。

北九州芸術劇場小劇場  
参加者11約一八〇人

文学講座  
4月26日(土)～5月31日(土)

本展第三部監修の近藤晋平氏ほか、研究者による連続講座を行いました。様々な視点から、与謝野寛・晶子の魅力についてお話しいただきました。

◎國生雅子氏(福岡大学教授)

「文学と美術―総合芸術雑誌としての『明星』」

◎井上洋子氏(福岡国際大学教授)

「『明星』から『スバル』へ―晶子、評論活動への転換―」

◎島田裕子氏(歌人・梅光学院大学教授)

「鉄幹への愛―与謝野晶子と山川登美子の恋の歌について―」

◎阿部誠文氏(歌人・俳人・九州女子大学教授)

「『白桜集』―晶子の鉄幹への愛の歌―」

◎近藤晋平氏(近代文学研究家)

「九州と与謝野寛・晶子―若松・中津・人吉を中心に―」

受講者11各回約三十五人



近藤晋平氏

来館者の声

◇与謝野寛・晶子の直筆を見ることができ感動しました。(六十代女性)

◇晶子の短歌の素晴らしさに圧倒されました。(六十代女性)

◇書簡や本だけではなく、その人となりに関わるものまで近くで見学でき素晴らしい。細部まで郷土と関連づけて教えていただき嬉しく思います。(四十代女性)

◇若松に来訪していることを初めて知りました。(六十代男性)

◇晶子訳の源氏物語を愛読しています。今回は言や書簡など普段見ることのできないものに触れ非常に感銘を受けました。(六十代女性)

このほか、たくさんのご感想をいただきました。ありがとうございます。

▲平成二十年度 夏の企画展

「くまの子ウーフとたのしい仲間たち 神沢利子展」

7月19日(土)～9月15日(祝・日)



「ウーフを作ってみよう」より

神沢利子さんおはなし会

「同じうたを

うたい続けて」

8月1日(金)

本展の開催に伴い、神沢さんと児童文学誌「小さい旗」主宰・水上平吉さんによるおはなし会を行いました。

神沢さんには、一つ一つの作品に対する思いや、自身の来し方について語っていただいたほか、新刊のご著書からすてきな詩の朗読もありました。

かわいい参加者とのやりとりなど、会場はあたたかくやさしい雰囲気になりました。

水上 幼少時にすぐ離れたにもかかわらず、ご著書のプロフィールには必ず「福岡県出身」とあります。お母様も福岡士族の家のご出身ですが、そのことを含め、生まれ故郷への感慨があまりでしょうか。

神沢 母からは、私の生まれた

戸畑の話、母の生まれ育った福岡の話をししばしば聞いて育ちました。

私が物心ついたのは札幌です。それからすぐに樺太(現・サハリン)へ渡りました。十三、四までそこへおりましたが、その間母親から何度も故郷の話聞きまして、本当に、故郷とは懐かしいものだろうな、と思いました。

母は福岡の大名小学校へ通い、女学校を出てすぐに、数え年十九くらいで結婚したようです。父親は炭鉱勤めでありちこちへと赴任先が変わりましたから、「里帰り」ということはしたことがないんじゃないかと思えます。

夫の後について、子を六人も生んで、当時は地の果てと思われていた樺太まで。父親は、炭鉱が大きくなるとイヤみたいで、露天掘りといわれるような、開発の初期段階ばかりを追いかけるんです。だから、不便なところばかりで。小さな町、村で、たくさんの子を育てて暮らした、そういう母でした。

その母は、どんなに故郷を恋しがっただろうなあ、里帰りもしたことなかったんだろかなあ、と。自分が年をとってからしみじみと思えます。ここへ来ると母のことばかり考えられますね。

水上 結核で病気がちの少女時代を送りましたが、十七歳のときに学校の先生から宮沢賢治を薦められたそうですね。

神沢 学校の図書館にあった立派な宮沢賢治全集でした。開くと薬品の匂いがぷんとし、上質の紙に書いてあって。

最初に読んだのは「銀河鉄道」だったか。とにかく、活字一つ一つが宝石のようにキラキラ光って、目に飛び込んでくるようでした。そして、とても透き通った音楽が聞こえてくるんです。そういう感覚を味わったのは、宮沢賢治が最初でした。十七歳のときです。

この話をする時、いぬいのみこさんも「私も十七歳のときに読んだのよ」って。共感してよくその話をしました。



神沢利子さんと水上平吉さん

神沢利子さん  
おはなし会アンケートより

◇とてもステキな神沢先生に魅了されました。エッセイなどもぜひ読ませていただこうと思えました。(二十代 女性)

◇本人のお話には人柄が表れる。年を重ねたすばらしさのオーラがありました。(五十代 女性)

◇詩の朗読が心に染みしました。(四十代 女性)

◇母から母へと続いていく中に物語が生まれ育つこと…ちよつとナミタでした。(六十代 女性)

◇神沢さんの本は一冊一冊に思いをこめて書いていることが分かります。(十五歳以下 女性)

◇ぼくはウーフのお兄ちゃんになりたいです。(十五歳以下 男性)

(十五歳以下 男性)

展示資料 約八〇点  
入場者数 二六三〇人  
(八月三十一日まで・イベント含む)

水上 神沢さんの代表作「くまの子ウーフ」についておうかがいしたいと思います。特に「ウーフはおしっこでできてるか??」の一篇が当時、大変な話題になりました。

神沢 それまでは「ちびっこカムのぼうけん」のようなものを書いていました。冒険物語というの、筋立てがはつきりしていて、面白い。人をぐつと惹きつけます。つまり、「物語」なんです。

物語の組み立て方——始まりがあつて、高まりがあつて、終わる——それを勉強しようとしていました。日本人は構成力が弱い、と文学の世界では言われていて、もっぱらそのことを頭に置いて書いていました。



それから十年経ち「さて、今度は違ったものを書きたい」と思つたんです。筋立ての面白さではなく、物事をもつと端的に、本質的にとらえた、詩のようなおはなしが書けないだろうか、と試みたら「くまの子ウーフ」でした。「ウーフはおしっこでできてるか??」もそのようなもの一つです。

「自分は何者であろうか」という問いは常にありました。小さいときから自分はなぜ、蛙でも鳥でもなく、人間の女の子に生まれたのだろうか、ということが不思議でしたね、思い返しながらすてきな思い出ができました。

だいたい私は結核でしたし、童話を書くときに子どもを観察する、ということが全くありませんでした。何をよりどころにするかと言えば、自分が子どものときにどう感じたか、ということ。自分の中に深く潜っていつて、子ども時代を思い返すんです。

私はサハリンの原野に育ちましたから、その美しさが表

れる。すると、病気で伏せている自分が自由に駆け出すんです。そのようにして、書くことで自分もまた元気になったと思つています。

北九州芸術劇場小劇場  
参加者 約一五四人

+++++  
手芸教室  
「ウーフを作ってみよう」  
8月23日(土)・24日(日)全2回  
+++++

ここ一番の人気イベントになりました。当初募集の一五組では追いつかず、急きよ教室枠を広げ、二日間の開催に。講師は北九州おもちゃライブラリー副館長の加藤久美子さん。みんな、ウーフと一緒のすてきな思い出ができました。

参加者 五四組



加藤久美子さん(中央)

+++++  
ブックトーク+クイズラリー  
7月26日(土)・8月9日(土)  
8月23日(土)・9月13日(土)  
全4回  
+++++

グループ「すぎのこ」、「児童文学を読む会」の方々にご協力いただき、ブックトークを行いました。子どもたちへ読書の楽しさを伝えるブックトーク。今回は神沢作品の魅力、クイズや紙芝居などまじえ紹介しました。

参加者 各回 約三〇人



+++++  
16mmフィルム  
「ちびっこカムのぼうけん」  
映写会  
8月3日(日)・31日(日)全2回  
+++++

日本初の長編人形劇アニメーション「ちびっこカムのぼうけん」(原作・神沢利子 監督・河野秋和 一九七六年)映写会を行いました。北の国を舞台にした壮大な物語で、かわいらしい動物たちが大活躍。とても楽しい作品でした。

参加者 各回約四五人



参加者 一九人

▲佐木館長と学ぼう！  
子どもペンクラブ  
7月27日(日)・7月30日(水)・  
8月10日(日) 全3回  
昨年引き続き、佐木隆三館長によることもたちへの文章教室を開催しました。本年は全3日のカリキュラムを組み、ルポルタージュの執筆に挑戦。北九州市消防局指令センターへ取材を行いました。

教室内での意見交換はもちろん、取材先では時間が足りないほど活発な質問を行い、懸命にメモを取っていました。

取材後すぐに、原稿用紙へすらすら鉛筆を走らせる、小さなライターたちに佐木館長も舌を巻きました。

## ▲対談「自分史を語ろう」

館長佐木隆三がホスト役を務める対談「自分史を語ろう」を第二回に続いて開催しました。北九州市自分史文学賞をはじめとする「自分史文学」の情報発信拠点として、様々な分野で活躍する市民の方に自分史をお話しいただいております。

### 【第三回】

＊お話し添田裕吉さん

2月24日(日)



添田裕吉さんは、第二次世界大戦中、ルソン島での地上戦に従軍。この経験から退職後、戦没者遺族からの相談や調査に携わるようになります。これまでに受けた相談は千件、実際に戦没地へ案内した遺族は五百人以上にのぼります。

対談では主に、通信兵、臨時歩兵として目の当たりにした地上戦と玉砕の実態、戦没者調査

への思いや、遺族との交流の思い出などが語られました。

最後は、過酷な経験も含めこれまでの人生を「楽しかった」と振り返った添田さん。黄檗宗研究者で郷土史家の叔父・吉永卯太郎から贈られたという「何にでも興味を持ち何でも好きなことをやりなさい」との言葉で、対談を締めくくりました。

参加者から地上戦に関する具体的な質問や、実際に戦争で家族を亡くされた遺族からの問い合わせなども相次ぎました。

参加者 二七人

### 【第四回】

＊お話し阿南惟正さん

3月30日(日)

ゲストは元・新日本製鐵代表取締役副社長の阿南惟正さん。館長とは八幡製鐵所時代から五十年来の友人でもあり、対談はなごやかな雰囲気の中で進みました。

阿南さんは二十八歳で社命によりブラジルへ渡航し、ウジミナス製鐵所建設に参加。海外旅行もまだ珍しかった時代に、文化や言葉の違いを越えて、海外の人々と共に働き生活した苦勞

や交流の思い出などについてお話しいただきました。

「山に建設する製鐵所」を支えた日本の技術、子どもの進学のためにと必死で働く日系の



人々、おが屑で即席の畳を作った開いた柔道教室：「障害は多かったが、壁を乗り越えて人間同士仲良くなり、何よりひとつの目的を共有していた」と阿南さんは振り返ります。ウジミナスは二〇〇二年に創立四十周年を迎え、交流は今も続きます。当日、会場には当時を知る元同僚の方も多く来場され、八幡製鐵所OB二人による対談に聞き入っていました。

参加者 三五人

### 【第五回】

＊お話し吉岡稔真さん

7月9日(水)

小倉南区出身の吉岡さんは、元競輪のスター選手。現在は解



説者として活躍しながら後進の育成にも取り組んでいます。そもそも競輪選手になろうと思っただきっかけは、父への反発の気持ちからだったといえます。

小倉競輪場での初出走では、客から罵声を浴びてプロの世界の厳しさを知り、この先どう生きていこうかと思ったそうです。怪我で苦しんだ経験も語って下さいましたが、「自分の払った税金で勝山公園はきれいになったのでは」などとユーモアを交え、会場が笑いに包まれる場面もありました。

参加者 六〇人

### 【第六回】

＊お話し植木通彦さん

8月28日(木)

植木さんは小倉南区出身の元競艇選手。現在は日本モーター

ボート競走会の理事として後進の指導などに携わっています。

選手を目指したのは、経営していた会社がうまくいかなかった父親を助けるためでした。家族の笑顔が見たいと高校を休学し研修所に入所。厳しい訓練を経て十九歳でデビューしますが、三年後のレース中に転覆し、後続艇のプロペラに顔を切り刻まれる壮絶な怪我をします。

しかし半年後に復帰、数々の記録を達成しました。この怪我をした時に、あと20年でレースはやめようと決意していたといえます。家族や高校の先生、競艇場のスタッフや医師、何よりもお客さんに支えられてきたという植木さん。参加者からの質問に対して、大切にしている言葉は「感謝」と答えました。

参加者 五〇人

## 対談「自分史を語ろう」



+++++  
 「250号・55周年記念  
 詩誌「沙漠」展  
 —ここにありここに立つ  
 そして歩む—  
 6月14日(土)～7月13日(日)  
 +++++

詩誌「沙漠」は昭和二十七年  
 に小倉で創刊し、以来北九州で  
 発行を続けてきました。今年、  
 二五〇号発行、五十五周年を迎  
 えるのを記念し、そのあゆみを  
 たどる展覧会を開催しました。

創刊号から二五〇号までの「沙  
 漠」や、同人の詩集、原稿、展  
 覧会のテーマに合わせて制作さ  
 れたオブジェなどを展示しまし  
 た。



+++++  
 詩誌「沙漠」主催  
 文学講座  
 6月15日(日)・6月29日(日)  
 7月12日(土)  
 +++++

会期中に、九州で活躍する詩  
 人を招き、二回の文学講座が開  
 かれました。

◎宮本一宏氏  
 「九州「昭和中期」詩精神を探る」



◎渡辺玄英氏  
 「〇年代現代詩の今」



◎岡田哲也氏  
 「詩のたのしさ 詩のかなしさ」



▲交流ステージ &  
 ワークステーション

+++++  
 小倉五行歌会  
 五周年記念作品展  
 6月21日(土)～6月27日(金)  
 +++++

小倉五行歌会主催による「小  
 倉五行歌五周年記念作品展」が  
 開催され、約七〇点が展示され  
 ました。五行歌は、五行で書く  
 というほかには、制約がなく自  
 由な詩型の詩歌です。「ごめん  
 なさい」が、言えなくて、影法  
 師に、心を入れて、寄り添って  
 歩いた」「わき見して、寄り道  
 して、それぞれ歩いて、いつ  
 の間にか、同じ歩幅」など、新  
 しい感性で描かれた作品世界は  
 とてもみずみずしく、来館者の  
 関心を集めていました。

展示資料二七〇点



小倉五行歌会のみなさん

+++++  
 子ども文化ふれあいフェスタ  
 「落語つ子 落語であそぼう」  
 8月30日(土)  
 +++++

山椒家小粒さんら「噺の会  
 じゅげむ 小倉出張所」の皆さ  
 んをお招きして、落語体験講座  
 を開催しました。

まずは「落語ってなに？」の  
 落語入門講座からはじまり、「平  
 林」の実演を鑑賞。落語ははじ  
 めてという子どももすっかり聞  
 き入って、笑いの輪が広がりま  
 した。

手拭いや扇子といった小道具  
 の使い方も練習。参加者は、自  
 分で考えた芸名で高座に上が  
 り、覚えたばかりの小噺を披露  
 しました。  
 参加者二五人



こぼろつりか



山椒家小粒さん (右)



九州市民大学のみなさんによる見学会  
 平成20年6月12日



福岡県高等学校芸術・文化連盟文芸  
 専門部の合評会  
 平成20年7月20日



保育士さんの研修で館長が講演  
 平成20年7月23日

予告

▲企画展「機械遺産認定記念 矢頭良一展」

文学館寄託品の「自動算盤」が日本機械学会主催の「機械遺産第30号」に認定されました。それを記念し、製作者の矢頭良一を紹介いたします。矢頭は、森鷗外の「小倉日記」にその交流が描かれるなど、鷗外の人柄を知る上でも重要な人物です。

\*開催期間 9月27日(土) ~ 11月30日(日)



自動算盤



矢頭良一

▲響き合ふ 詩誌「たむたむ展」

一九七二年に創刊し、発刊百号を越える北九州の詩誌「たむたむ」の展覧会を開催します。

\*開催期間 12月6日(水) ~ 平成21年1月12日(月・祝)

▲「伊馬春部展」記念 岡野弘彦氏講演会

「伊馬春部の文学と人生」

伊馬春部とともに折口信夫(釈道空)に学んだ歌人で國學院大學名誉教授・岡野弘彦氏を講師に迎え、伊馬春部の文学と人生について講演いただきます。



お申込方法は、市政日より九月十五日号をご覧ください。  
\*日時 10月29日(水) 午後1時30分~3時

\*会場 北九州芸術劇場 小劇場

▲「伊馬春部展」記念公演 「ラジオドラマ脚本『屏風の女』を読む」

劇団俳優座の矢野宣さんをお招きして、伊馬春部原作のラジオドラマ「屏風の女」を再現します。共演は朗読家の三輪純子さんです。



お申込方法は、市政日より九月十五日号をご覧ください。  
\*日時 10月26日(日) 午後1時30分~3時

\*会場 小倉のせせらぎ座(北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館内)

▲文学館開館二周年記念講演会 「杉田久女の世界を語る」

俳優の栗原小巻さんをお招きして、俳人・杉田久女について館長の佐木隆三と対談を行います。また、作品の朗読も行います。

お申込方法は、市政日より十月一日号をご覧ください。  
\*日時 10月25日(土) 午後1時~3時

\*会場 ウェルシティ小倉(九州厚生年金会館)

▲文学館開館二周年記念講演会 「杉田久女の生涯と俳句」

俳人・黛まどかさんに副館長の今川英子がお話をうかがいます。また、評伝「杉田久女」の著者・坂本宮尾さんにご講演いただきます。

お申込方法は、市政日より十月十五日号をご覧ください。  
\*日時 11月18日(土) 午後1時~3時

\*会場 北九州芸術劇場 小劇場

◎資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧 (平成二十年八月現在)

寄贈者・提供者 秋田文字

- 麻生久 家原文昭 犬塚遼 入江春行 岩男将司 枝見太朗 岡田哲也 おだじろう 海鳥社 風間美樹 柏木恵美子 鎌倉文学館 神沢利子 木村千恵子 倉本美代子 河野正彦 小島敬三郎 五所美子 兒玉充代 坂本君江 坂本悟朗 坂本福治 品川洋子 白根友吉 管博一 高崎絏子 竹田徹 津田菜 土田晶子 坪井勝男 寺井谷子 土肥光江 中林淑子 中原敬子 中元大介 西城輝子 野田宇太郎 文学資料館 野中貴子 八田昂 早田光代 原田咲子 増田連 丸橋紀久子 宮本一宏 本村義雄 山口公和 山下敏克 与謝野晶子文芸館 餘戸雅一 受贈雑誌 青嶺 色鳥 沖 海峡派 牙 玄海 九州作家 九大日文 群炎 自鳴鐘 川柳あやめ 川柳くらがね 川柳むらさき たむたむ 天籟通信 菜殻火 虹野 はなを ふだんぎ北九州 文藝公論(五十音順・敬称略)

▲文学館文庫の出版

現在書店ではなかなか入手できなくなった北九州ゆかりの文学者の作品を出版しています。



第4巻「伊馬春部集」 定価1000円(税込み) 10月発刊予定



発行 2008年9月15日  
北九州市立文学館  
〒803-0813  
北九州市小倉北区城内4-1  
TEL 093-571-1505  
http://www.city.kitakyushu.jp

■開館時間

火~金 9:30~19:00(入館は18:30まで)  
土・日・祝 9:30~18:00(入館は17:30まで)

■休館日

毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)  
年末年始



- JR小倉駅より徒歩15分
- JR西小倉駅より徒歩10分
- 北九州市役所前(スズメ通り)徒歩2分
- 北九州市都市高速大手町ランプより2分
- 駐車場は文学館裏の各有料駐車場をご利用下さい